

境界性パーソナリティ障害のロールシャッハ反応に関する臨床心理的研究

—トラウマの軌跡を探る—

心理臨床学専攻 成 願 めぐみ

I. 問題

コントロールできない激しい怒りや抑うつ、気分の著しい変動、孤独に耐えられず、対人関係に不安定さを特徴とする「境界性パーソナリティ障害 (Borderline Personality Disorder : BPD)」は、近年日本においても多くなってきたといわれる。その原因として、1980年代後半から、BPDと外傷体験との関わりが注目され、他の外傷性障害との関連性も指摘されてきた。現在は欧米のみならず、日本においても、幼児期の虐待や外傷的養育環境を含め外傷体験が明らかにされてきている。しかし、BPDのトラウマは「外傷後ストレス障害 (Posttraumatic Stress Disorder : PTSD)」ほど顕著でなく、パーソナリティに内在する部分もありなかなか把握しにくい。本研究ではBPDに何らかのトラウマがあるとの視点に立って、BPDのロールシャッハ反応に見られるトラウマの標 (しるし) を探ろうと試みた。

II. 研究方法

明らかなトラウマが原因となって引き起こされたPTSD群のプロトコルの特徴と、BPD群のプロトコルの特徴とを比較し、両者がもつ共通点を導き出すことを主眼とした。具体的には対象はPTSDの症例9ケース (PTSD群)、BPDの症例11ケース (BPD群)、比較群として健康な人 (N群) 10ケースのロールシャッハ・プロトコルを、名古屋大学方式を用いて分析した。量的分析では、すべてのスコアについてKruskal-WallisのH検定を用い3群を比較した。また、有意差が出たものにつき、Mann-WhitneyのU検定を用い2群間比較をおこなった。事例的研究では、それぞれの事例の「情緒的側面」「対人関係の側面」「思考・言語カテゴリー」「イメージカード」につき各群の特

徴を分析し比較した。また、PTSDの主症状である「再体験」「回避・感情の麻痺」「覚醒亢進 (神経過敏)」を思わせる反応を各事例から抽出し、各群の特徴を分析し、その比較を行った。

III. 結果と考察

(1) スコアの量的研究

各群のスコアの量的特徴としては、すべての群に共通するものとして、F%が低い傾向にある、W%が高く、 $W > M$ 、Tot. Affectが高いことがわかった。また、BPD群とPTSD群に共通するものとしては、Tot.Rがやや少なく、VIII・IX・X/R%が低い傾向にあり、 $FC < CF + C$ が多く、H%が高い傾向にある。両者の違いとしては体験型の違いがあること、またPTSD群に特徴的なこととしてP反応が多いこと、Card Turningがほとんどないこと、add.がほとんどのケースに見られたことなどが特徴としてあげられた。

また、統計的分析においては、反応内容の「血液反応 (BI)」が、BPD群もPTSD群もともにN群より有意に多かった ($p < .05$)。また、感情カテゴリーの「快的感情 (Positive feeling)」については、BPD群もPTSD群もともにN群より有意に少なかった (N群-BPD群では $p < .05$ 、N群-PTSD群では $p < .01$)。同じく「装飾反応 (Porn)」についてもPTSD群とBPD群はN群より有意に少ない ($p < .05$) という結果となった。また、「 $FC : CF + C$ の比率」においても有意差がみられ、PTSD群とBPD群は「 $FC < CF + C$ 」の傾向がN群より有意に多い ($H(2) = 9.816$, $p < .01$) ことがわかった。

感情統制の低下を示す色彩優位の反応の多さは、先行研究においてもそれぞれの群の特徴として示されているが、ここでは共通の特徴として、喜び

の体験の少なさ、情緒的刺激に対する耐性の弱さなど、感情の領域での特徴が示唆された。

また、質的研究では、両者の「感情」の質において、共通した「脅威不安」「抑うつ不安」「嫌悪感情」がみられた。先行研究で扱われていたエクスナー法の「MOR」(不快な内容)が、名大法の「脅威不安」「抑うつ不安」「嫌悪感情」および「欠損反応」に含まれていることを考えると、トラウマと「MOR」の関係は深いということが今回の研究でも示唆された。今後、スコアされた感情カテゴリーの質についてももう少し詳しくみてゆくと、よりこの特徴がはっきりするのではないかとと思われる。

「対人関係の側面」については、先行研究に述べられているような、Hd反応、Stange Human反応などの量的な違いは特に見られなかった。両者の共通点としてはHuman反応にしてもStrange Human反応にしてもNegativeな明細化(「ケガをしている」「邪魔している」など)がなされているということがあげられる。一方、両者の違いとしてはStrange Human反応の質的な違いが見られた。PTSD群のStrange Humanはいわゆる「お化け」「悪魔」のような"normal strangeness"ともいえるもので、normal群にも見られる反応である。一方、BPD群の場合はより"fantastic strangeness"といえるもので、同じStrange Human反応でもその内容の違いがみられ、BPD群は基本的な対人信頼の部分でトラウマの影響を受けているのではないかとのニュアンスが示唆された。

思考・言語カテゴリーではPTSD群とBPD群に共通して多くみられたものはFabulization ResponseとPersonal Responseであった。特に、Fabulization ResponseについてはPTSD群のほとんどの事例に強い感情を示すaffective elaborationがみられ、そのいくつかには外傷的出来事の想起がみられた。これはBPD群にもみられるが、BPD群の場合はoverelaborationなどの作話機能が強い表現の方が特徴的である。また、被害的な内容の反応には作話機能は強く働く傾向があるよ

うである。N群については、ほとんどの事例に強い情緒の表現はなかった。

Fabulization Responseでは先行研究に見られる「作話反応」や「作話的結合反応」の範疇に入るものと思われ、本研究でも同様の結果がみられたということになる。またPersonal Responseは個人的経験と現実吟味の在りようが問題となるカテゴリーであるが、これによって自己関連付けの強い反応や、過去の出来事の侵入的想起が生じ、トラウマと強く関連性のある指標であると思われる。

また、PTSD症状に視点を当てた分析、およびイメージカードの分析では、3群を比較して、PTSD群ではそれぞれのトラウマを思わせる反応が生じており、また、BPD群でも対人関係を含めた外傷的体験を思わせる反応がみられ、それらは往々にしてMost Disliked Cardに選択されていた。また、両親との関係にトラウマ的な状況がある事例には被害的場面や、不穏な関係性が象徴的に表現されていたり、直接的にFather Image CardやMother Image Cardに表現されたりしていた。このような視点もロールシャッハ反応を読む際、トラウマを知るための助けになるのではないかと考える。

以上が本研究でおぼろげながら見えてきた「ロールシャッハ反応における、境界性パーソナリティ障害のトラウマの軌跡」である。この他、分析ができなかったものや、考察の不十分なものもあるが、今後の課題としたい。